Istituto Figlie di Maria Ausiliatrice
Salesiane di Don Bosco

和解と平和の職人 シスター マリア・トロンカッティ

シート 1
家族と召命の選択

マリア・トロンカッティの生誕（1883年2月16日）を記念する2月は、未来の聖人の出身地の画像を紹介するビデオと、マリア・トロンカッティが両親に宛てた手紙の朗読を通じて、彼女の家族の絆と職業選択について詳しく見ていきたいと思います。

神の言葉

「親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。 40幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」（ルカによる福音　2章 39-40節）

Video: Suor Maria Troncatti - I primi passi del suo cammino
（シスター マリア・トロンカッティ ― 彼女の最初の歩み）

シスター マリア・トロンカッティの伝記より

マリア・トロンカッティとその家族

「そして青春時代が訪れる。マリアはその主役となる。まずは家の中から。彼女は多くの仕事と責任を自ら引き受けるようになる。[...] 彼女は農作業をしながら、常にさまざまな仕事をこなしていた。姉のカテリーナはすでに裁縫の仕事に専念し、腕の良い仕立て屋になっていたため、他の家事から解放する必要があった。こうして、ほとんど気づかないうちに、マリアは弟のジャコモの教育係兼補佐の役割を果たすようになった。[...]
マリアの青春時代は、内面的に豊かな経験に満ちていた。トロンカッティ家は多くの親族とつながりがあり、まるで昔ながらの大家族のように強い絆で結ばれていた。皆が仕事に励んでいたが、それは決してお金を得るためではなく、まるで一日の始まりと共に自然に始まる呼吸のようなものだった（人生の朝と同じように）。仕事は激しいが、焦ることはなく、犠牲を伴うが、自発的で喜びに満ちたものだった。それはまるで芸術作品を作るように、家族と共に、自然と肌で触れ合い、季節のリズムを感じながら、何世代にもわたって受け継がれてきた知恵と共に行われた。
そして、仕事、生活、家族、青春、老後、願望、希望のすべてが、信仰と祈りによって育まれていた。この生きた共同体の最も象徴的な瞬間は、特に秋と冬の長い夜であった。家族や近所の人々と一緒に集まり、納屋にいることもあった。ロザリオを唱え、その後、物語を語り、冗談を言い合い、歌を歌った。その間も手は休むことがなかった。[...]
マリアが歌おうとすると、音程を外して皆を笑わせた。しかし、彼女は歌わなくても人を笑わせることができた。冗談や機知に富んだ言葉、さまざまな小話で皆を楽しませた。妹のルチアによると、父親は彼女を「わが愛しき地震（el me car taramot）」と呼んでいたという。厳格さと愛情――それは控えめだが繊細に伝わる愛情であり、一生残り続けるものであった。
マリアは父ジャコモに似ていた。彼は心から愛する人だったが、その愛を表現するのが控えめで、もしかすると、一つの言葉や仕草でその純粋な感情を壊してしまうことを恐れていたのかもしれない。」
（マリア・コッリーノ、『すべてを捧げた「はい」の恵み』、レウマン、エレディチ、2012年、17-20ページ）

召命の選択

「1905 年 10 月 15 日、その運命の日が訪れた。父ジャコモはまだ「はい」と言うことができなかった。しかし、妻の繊細な支えと、素朴ながら理解ある司祭の助けによって、反対を口にすることはなくなっていた。なぜなら、そうすることで状況をさらに複雑にしてしまうだけだと悟ったからである。[...]出発の時が迫る…マリアは胸が締め付けられるのを感じた。最後の涙、最後の抱擁。彼女は家の庭を横切り、道へと続く門へ向かう。振り返りたくなかったが、背後に何か異変を感じた...そして彼女は気づいた。父が気を失ったのだった。地面に倒れることはなかったが、司祭が彼を支えていた。いったい何が起こったのか？[...]最終的にジャコモ氏は娘を祝福することができたが、それは彼の心から溢れ出る涙と引き換えだった。しかし、その努力はあまりにも大きすぎて、彼を圧倒したのだった。マリアはその瞬間、出発を延期しようと思っただろうか？それは分からない。しかし、彼女が一瞬ためらったことは間違いない。」（同書、24 ページ）

振り返りのために

1. 若きマリア・トロンカッティの召命の選択に、家族環境はどのような影響を与えましたか。

2. マリア・トロンカッティの召命の選択に対して、あなたはどのような感情を抱きますか？

3. **若者たちへ**：今日、召命の選択を容易にしたり、または妨げたりするものは何ですか。信仰の道を歩む中で、あなたを支え、導いてくれる指導者（大人の教育者、司祭、シスター　ブラザー）はいますか。

4. **大人の教育者たちへ**：シスター　マリア・トロンカッティの生き方から、家庭の在り方についてどのような点を学び、それを子どもや若者の教育に生かしたいですか。わたしたちは、若者が重要な決断や危機の時に寄り添い、彼らが自由に選択し、神の道を歩むことを支えることができるでしょうか。

祈りのために

祈りの意向：私たちの家族、特に困難や危機の中にある家族のために。

愛の源である神よ、
家庭という、成長、許し、喜びの場を与えてくださり感謝します。
すべての家族、特に困難の中にある家族のために祈ります。
家庭がいつも愛、尊敬、理解に満ちた場となりますように。

主よ、シスター・マリア・トロンカッティの家族を感謝します。
彼らは彼女に信仰と隣人愛を教えました。
私たちも、彼女のように
寛大な心と献身をもって愛することを学びたいと願います。

シスター・マリア、あなたは結束のある家族の愛を知っていました。
どうか私たちと私たちの家族のために祈ってください。
私たちがキリスト教の価値を守り、
互いに助け合い、
今日の世界で神の愛を証しすることができますように。
アーメン。

両親に宛てた、シスター マリア・トロンカッティの手紙

シスター　マリア・トロンカッティが書いた　81　通は手紙集にまとめられており、そのうち40通は彼女の家族に送られたものです。次の手紙は彼女が両親に送った最初の手紙です。マリアと彼女の家族にとって、召命の選択と家を出るという選択は、非常に困難で、ほとんど劇的な瞬間でした。ニッツァ・モンフェッラートの養成支部で志願者として３か月間を過ごしている彼女は、長い間家族に連絡せずにいたことを謝罪しています。彼女は、自分が下した選択にもかかわらず、それが決して失われることはないと言って、その愛情を表現しています。彼女は寛大さと決意を持って、主のためだけにそれを選んだのです。

イエスとマリアは賛美されますように

[1906年1月17日　ニッツァ・モンフェッラート]

愛する両親へ

　私の沈黙によってあなた方に不快な思いをさせてしまったことを大変申し訳なく思っています。あなた方の親愛なる手紙を読んで、あなた方がカテリーナに文句を言っているのを聞いて、涙があふれてきました。彼女が、私が何を言ったかさえ覚えていないことを言ったので、あなた方は私の愛が薄れたと思っているのでしょうか。…ああ、私の親愛なる両親様、私はこの考えがあなた方の心を少しでも支配することを望みません。私は主のために寛大にこの一歩を踏み出し、心から感謝し、継続する良い恵みを主が与えてくださるよう絶えず祈っています。しかし、結局、たとえ私が100年生きたとしても、忘れることはできないでしょうが、その愛は私の心の中で常に燃え続けるでしょう。

　ですから、親愛なる皆さん、もし悪魔が邪悪な策略でこれらのことをあなた方の心に植え付けたのであれば、それらをすべて追い払い、代わりに私たちの父であり、すべての人を慰める方法を知っているイエスのみ心の周りに集まりましょう。

　また、手紙の中で、お母様が家を離れていることも知りました。お母様は家族から遠く離れて一人でいるため、私はとても悲しく、涙がおれほど流れたか分かりません。親愛なるお父様と姉妹たちよ、どうか、いつも私たちに同伴し、彼女を幸せにするためにたくさんの素敵なことを話してくれる人がいてくださいますように。私は健康状態が非常に良く、とても幸せで明るく暮らしています。

　この愛すべき修道会に来て、今日で３ヶ月になりますが、まだ３日間のような気がします。もう一度お願いしますが、お話しした金額、つまりポストランテ期間のための100リラとマットレスの10リラを私に送っていただけますか。皆さんをあまり退屈させないように、幸せでいることをお勧めして終わりにします。

　あなた方に慰めとなるニュースもお伝えします。私はクリスマスの日の真夜中に聖体拝領を受ける栄誉に浴し、あなた方を一人ずつ幼子イエスに何度もお願いしました。信じてください。私は物質的なことであなた方を助けることはできませんが、神の助けによって精神的なことであなた方を助けるつもりです。主任司祭には多くの義務があります。

　さようなら、私の愛する両親と姉妹たち、私のためにもお祈りください。

敬具あなた方の愛するマリア・トロンカッティ

P.S. 私の親愛なる長上方より、家族全員に心よりお礼申し上げますとのことです。カヴァレッティ一家、おばあ様、従兄弟たちに心からの挨拶を送ります。親愛なるジェームズへ、どうか良い子になって、お父様とお母様やお姉さんたちのの言うことに従ってくださいね。